

氏名	坂野千登勢		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博文化甲第12号		
学位授与年月日	平成22年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第3条第3号該当		
学位論文題目	資源の再利用と古代社会 ——土器再利用の基礎研究——		
論文審査委員	委員長	教授	高久 健二
	委員	教授	初山 明
	委員	教授	権 純哲
	委員	准教授	一ノ瀬 俊也

論文内容の要旨

本論文は、奈良～平安時代における土器の再利用の分析を通じて、古代社会における再資源化システムの実態を明らかにし、土器の再利用を社会的環境の変化に対する適応戦略として考察したものである。具体的には消費地である集落遺跡から出土した須恵器・土師器を対象にして、形状タイプ分類と付着物等の観察・定量分析等を行い、灯火具、硯、紡錘車に再利用された事例が多数あることに着目し、土器の再利用に関する基礎的研究を行っている。とくに、灯火具としての再利用では、破損した須恵器・土師器の坏類や蓋などを組み合わせて、上皿・下皿・灯芯押さえとして使用するという再利用モデルを提示した。

これらの分析を通じて、古代においては再利用が特別な行為ではなく、むしろ再利用を行うことが前提とする社会であったことを指摘している。そのため、物質のライフヒストリーには①使用・再利用、②廃棄に加えて、③再利用のための再利用資源のストック・管理という第3の局面が存在することを明らかにした。また、土器の紡錘車としての再利用は集団による再生産活動であり、硯としての再利用は、地方豪族層の経済活動の一部であったという解釈を示した。これら土器の再利用にみられる経済活動が律令制という日本の中央集権的古代国家の政治システムを、実質的に変容させる要因の一つになったと指摘する。このように、土器の再利用からは、土器を素材として新たな道具を生みだし、資源として再活用するという、古代の人々の積極的で合理的な適応戦略が読み取れるとする。すなわち、再資源化システムは多様な環境変化に対応する適応戦略であり、社会を変化させる重要な機能を担っていたとする。

【目次】

序

第1章 再利用に関する学説史と問題点の整理

第1節 再利用の理論的枠組み

- 第1項 研究目的と意義
- 第2項 遺跡・遺物の形成過程と再利用

第2節 再利用と廃棄の整理

- 第1項 再利用と廃棄の関係
- 第2項 再利用と研究方法の模索

第2章 土器再利用の分析方法

第1節 再利用の分析と理論

- 第1項 再利用の分析手法と問題点
- 第2項 再利用に関する研究手法
- 第3項 再利用観察の形状分類

第2節 付着物と再利用の技術的背景

- 第1項 付着物と再利用
- 第2項 再利用の歴史的・技術的背景

第3章 灯火具としての土器の再利用

第1節 灯火具に関する研究史と問題点の整理

- 第1項 灯火具の変遷
- 第2項 古代の灯火具復元モデル

第2節 坏類の形状分類と付着物の数量分析結果

- 第1項 若葉台遺跡の土器再利用
- 第2項 住吉中学校遺跡の土器再利用
- 第3項 霞ヶ関遺跡群の土器再利用
- 第4項 氷川神社東遺跡の土器再利用

第3節 須恵器蓋の形状分類と付着物の数量分析結果

- 第1項 若葉台遺跡
- 第2項 入間郡内の遺跡

第4章 硯としての土器の再利用

- 第1節 硯の研究史と問題点の整理
 - 第1項 硯の学説

- 第2項 定形硯と再利用硯研究の問題点

第2節 国直轄官衙における硯の出土状況

- 第1項 平城京の硯
- 第2項 多賀城跡の硯
- 第3項 大宰府の硯

第3節 定形硯と再利用硯の出土状況

- 第1項 武蔵国の主要遺跡の定形硯と再利用硯
- 第2項 武蔵国の定形硯の動態
- 第3項 武蔵国の再利用硯の動態
- 第4項 東国の定形硯と再利用硯の動態

第5章 紡錘車としての土器の再利用

第1節 紡織研究史と問題点の整理

- 第1項 紡錘車の概観
- 第2項 日本の紡織に関する研究史
- 第3項 紡錘車の性格と変化

第2節 古代武蔵国の紡織

- 第1項 鉄製と再利用の紡錘車の性格
- 第2項 武蔵国の紡錘車の出土状況
- 第3項 武蔵国主要遺跡の紡錘車の特徴

第3節 韓半島南部の再利用紡錘車の様相

- 第1項 瓦再利用の紡錘車
- 第2項 再利用の紡錘車と円形土製品

第6章 考察

第1節 古代社会における土器の再利用

- 第1項 再利用の分析
- 第2項 再利用からみた古代社会

第2節 古代における再利用の体系化

- 第1項 古代の再利用
- 第2項 資源の再資源化モデル
- 第3項 モノの局面間の移動

第7章 結論

引用参考文献

図版出典

附表

論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2010年2月23日に公開で開催し、質疑応答を行い、論文内容を審査した。本論文の評価できる点は以下の通りである。

①これまでほとんど取り上げられてこなかったモノのリサイクルに着目

モノが生産され廃棄されるまでのライフヒストリーに、再利用という概念を導入することによって、モノとヒトとの関係性を明らかにする、新たな研究領域を開拓した点は、高く評価される。また、モノが再利用される場合には、再利用される資源がストック・保管される局面が必要であるという新たな視点を導入した点も注目される。この視点を取り入れると、生産→消費→廃棄というモノの時間的流れの中に、ストック・保管という局面が加わることになり、今後の考古学における型式学・編年研究にも大きな影響を与えることになるだろう。

②再利用の実態を把握するための方法論を確立

遺跡から出土する土器の詳細な観察と分類に基づいて、再利用の実態を把握するという方法論を提示している。とくに、人為的な土器の打ち欠きなどに基づく形状タイプ分類案や付着物による分類案は注目される。この視点は今後、日本考古学における遺跡調査の指針となっていくものと期待される。

③古代の灯火具に着目

灯火具としての土器の再利用に着目し、形状タイプ分類と付着物による定量分析を行い、再利用の実態を明らかにした点は、新たな研究成果として高く評価される。また、灯火具としての土器の再利用モデルを提示している点もユニークであり注目される。灯火具を単なる「明かりを灯す道具」としてのみとらえるのではなく、祭祀や宗教、行政の事務、鉄や紡織などの生産など、古代社会の諸活動と関連させて、再利用を考察している点が重要である。この研究成果については、すでに日本考古学の三大雑誌の一つである『考古学雑誌』第92巻第4号（2008年3月）に発表されており、学界からの評価を得ている。

④古代における土器の再利用を体系化

これまで、単なる節約と見られてきた再利用を社会システムの中に組み込み、多様な環境変化に対応する適応戦略として捉えなおしている点は斬新であり、今後注目されていくであろう。

以上のように、本論文の内容は高く評価されるが、問題点がないわけではない。発表会では審査委員から以下のような意見が出された。

- ・「社会システム」や「適応戦略」という用語を使用しているが、概念が曖昧ではないか。最初にこれまでの学説史を踏まえて概念規定すべきではないか。
- ・古代社会の特質と資源の再利用とはどのような関係があるのか。とくに、古代日本の律令制の特質と合わせて考察する必要があるのではないか。
- ・「価値観」という用語を使用しているが、古代の人々の価値観とは具体的に何を示しているのか。考古学から価値観にアプローチできるのか。
- ・灯火具、硯、紡錘車の再利用を扱っているが、この三者の関係性はどのようなものであるのか、また、経済活動とどのように結びつくのか。
- ・再利用のために「ストック・保管」の必要性を指摘しているが、遺跡における土器の出土状況等から積極的にこれを実証できる事例はあるのか。

上記の問題点の中には、早急に修正すべき点がないわけではないが、大部分は今後の研究課題といえるものであろう。したがって、現時点における本論文の学術的な価値は高く、今後の当該分野の研究における指針になると予想される。

以上により、学位論文審査委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定した。